

都合を押しつけて、結局追い詰めてしまうADHDやLDのある子どもに対して、われわれは支援の責任を果たさないといけない。われわれは、わかりにくい他者の意識について、推量する想像力をもつことで、初めて異質な他者を排除することなく認め合うようになれる。子どものあるところを予測する、とはそういうことである。すると、陳腐な表現であるが、よりよい関係を創出するのは、他者を思いやることではないだろうか。もつとも、同時にわれわれはADHDやLDのある子どもたちからも思いやられているのである。

支援は、支援する人と、支援される人の二者関係ではなく、互いに支え合うという関係である。結び目はつねにほどかれ、また結ばれる。

相手の思いを馳せながら、決して完全には重ならない思いであることを自覚し、それでも相手が主体的に生きていくことに、「私」も多少は役立つ存在であることを確認するといふことが、支援の場では生じている。まさに相互に支援し、思いやりを与え・与えられ続ける関係なのだ。

それでも、はじまりは対等ではない。支援するものが意志をもたない限り始まらない。すると、支援する側が、先に本を閉じてはいけないのだろう。相手のためにこちらが悩み、いろいろと心配し、そして何よりも苦しさに耐えて授

げ出さないといい覚悟が求められる。

この苦しさを軽減するために、これまで連携が求められてきた。支援者もまた、支援を必要としているのである。しかし、当事者の支援に求められるのは、顔ぶれの変わらないネットワークメンバーではなく、時々刻々と変化変貌をとげる状況に応じて求められる人材である。支援は、方法に対象者を当てはめるのではなく、種々の特性をもつ発達障害のある子どもと親が主体的にオーダするものに応えるものである。支援する組織形態は、しなやかで即興的、かつ柔軟で流動的な協働が求められる。われわれは必要に応じた結び目を作り、あるいはほどこき、時には、もつれながら歩んでいきたい。

ノットワーキングによる連携の経過そのものが、人間発達の生成を意味している。それ自体が育ちの過程でもある。これらを基本的に享受することなしには、共感性をもった関与を楽しむことはできない。私たちは特性に対処するのではなく、特性をもった一人ひとりの生活を豊かにすることへ向かいたい。

発達障害とは「生活障害」である。

おわりに

一九五一年に吉倉が翻訳したロバンの『むつかしい子の教育』⁽⁷⁾には、今読んでも、いや今だからこそ真理と思われる言葉が綴られていた。

「親たちや教育者は……大人の判断に従って子どもを判断しないで、子どもの行為を大人の動機ではなく子どもの動機によって説明しようと努めれば十分であろう。親たちや教育者はそれだけで子どもを大目に見るようになるから、理解ある態度で子どもの信頼と愛情を集めることができよう。されば「このような心持ちは子どもとの心の交流を助けるだろう」とあった。ここには、子どもへの普遍的なそして重要なわれわれのまなざしが説かれていると思う。

〔文 献〕

- (1) 川本隆史「序論〈ケアの社会倫理学〉への招待―ケアと社会のインターフェイスを点検する」川本隆史編『ケアの社会倫理学―医療・看護・介護・教育をつなぐ』六頁、有斐閣、二〇〇五年
- (2) 山住勝広、エンゲストローム編『ノットワーキング―結び合う人間活動の創造へ』新曜社、二〇〇八年
- (3) 椎原弘章「序」『小児内科』三三巻八号、一〇四五―一〇四八頁、二〇〇一年
- (4) ヴィゴツキー(柴田義松、宮坂瑠子訳)『ヴィゴツキー―障害児発達・教育論集』一一―一二頁、新読書社、二〇〇六年
- (5) 杉山登志郎『発達障害の子どもたち』四三頁、講談社現代新書、二〇〇七年
- (6) 鯨岡峻「発達障害の概念とその支援のあり方を考える『教育と医学』六三〇号、四―一二頁、二〇〇五年
- (7) ジルペール・ロバン(吉倉範光訳)『むつかしい子の教育』白水社、一九五一年

(たなか・やすお/精神医学)

厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）

1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達的变化：
地域ベースの横断的および縦断的研究
平成21年度 総括・分担研究報告書

発行日 平成22（2010）年 3月
発行者 「1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達的变化：
地域ベースの横断的および縦断的研究」 研究代表者 神尾 陽子
発行所 国立精神・神経センター精神保健研究所
〒187-8553 東京都小平市小川東町 4-1-1
TEL：042-341-2721（6237） FAX：042-346-1979
